

交通 評論



オリンピック誘致が決まったとたんに汚染水問題の報道が多くなったように感じる。それ以前から問題がなかつたわけではないが、外国から指摘されると弱いわが国の特徴がここにも表れたのだろうか。

台風のために堰(せき)を超えて流れだす様子は、あまりにも無策ではないかと思ひ、放置してきた東電と監督官庁の神経は理解に苦しむ。2年半の間、本当に大丈夫だったのか。それでも終息宣言がなされ、オリンピック誘致に成功した。その「つけ」をこれから払うことになるのは誰なのだろうか。

その後も台風の大雨によってタンクの周りの柵は壊れ、高濃度のストロンチウ

ム90を含む汚染水が海へ流れているという。長靴を履いて汚染水のタンクの周りで作業する現場作業員の映像を見ていると、本来責任を取るべき人は誰なのかと考えるてしまう。

一方、農地の除染は遅々として進まず、最近環境省による大幅な延期が報じられているが、すでに行われているところも問題なしとは言えない。

先日飯館村で唯一除染作業が始まっている須賀(すがや)の「仮々置き場」(仮置き場が決められないためにその「仮」である)を見たが、農地の谷あいが見渡す限り黒い大きな袋の山に埋まった異様な光景であった。

5段に積み上げられた大きな黒い袋と手前に非汚染土壌の白いマークのある袋

汚染水と汚染土壌

土器屋 由紀子

が積み上げられており、そばへ行くだけで強い圧迫を感じる。「仮々置き場」の期限については環境省は明らかにしないとのことである。

除染が終わって、帰って農作業をやるうとしたとき、もしこの土壌の山が自分の田の隣にあるとした

飯館村は230平方キロの広い村でその7割以上が山林である。汚染の激しい山林からの汚染に常にさらされている農地の周りにどのくらい量の黒い山が積み上げられることになるのだろうか。「日本で最も美しい村」の一つであったこの村の将来を思うと暗澹(あんたん)たる気持ちになる。

現在、NPO「ふくしま再生の会」(田尾陽一代表)では東大農学部の大教授

ら、帰村する気持ちになれないだろうか。除染されたら、避難生活は終了し、仮設住宅から出て自活することが要求される。除染してあげたのだから帰って農業をやりなさいといわれても、故郷に帰れるだろうか。汚染が激しいほど、また汚染の範囲が広いほど削り取った表土は膨大な量になる。

許されない。すべての田がこのやり方でやれるかどうかはわからないが議論に値すると思う。

それぞれの田について柔軟な対応策を行えば少なくとも黒い山を減らし、税金の無駄遣いも減らせるのではないかと。事故から2年半以上たつても15万人の避難が続く現状で、除染は待たないでいるが、それは拙速であつてはならない。現場を指揮する側がきちんとした調査と議論に力を入れて合理的な方法を取つてほしいと思う。

フクシマは決してまだ解決済みではないのである。「原発は安全でなければならぬから安全である」といった安全神話が「もう解決済みでなければ困るから解決されたことにする」として生き返つたのでは被災者がたまったものではない。

(江戸川大学名誉教授)